

## 竹青（蒲松齡「聊齋志異」柴田天馬譯）

[やぶちゃん注：昨年の五月に始めながら、既に一年近く更新をしていない[ブログ・カテゴリー「聊齋志異」](#)の底本を<sup>かえ</sup>変更、公開の<sup>しかた</sup>方式もPDF横書版とワード文書縦書版とすることにした。

一義<sup>ひとつ</sup>は、ルビ・タグでブログ公開することが、異様に労多くして実少ないと感じた<sup>から</sup>故である。しかも私のブログではルビ・タグを含むHTMLテキストを一寸でも<sup>なお</sup>修正しようもんなら、表示がぐちゃぐちゃになってしまうのである。当初、PDF縦書のみで考えたが、一部の漢字が横転するのが如何にも気持ちが悪い。そもそもが天馬訳を横書で読むこと自体が私に言わせれば、<sup>あつちやなんねえはなし</sup>「邪道」だからでもある。

次に、底本の問題である。

実は電子化を始めた直後に、[toumeioj3](#)氏のブログ「武蔵野日和下駄」の[「柴田天馬訳の聊齋志異について\(2\)」](#)を<sup>みいだし</sup>図らずも発見、そこで天馬氏の訳文が、角川文庫版ではこれ、実におぞましいほどに、いじられ、改変されている事実を知ったからである（これは最早、改竄と断じてよい）。それで実は、一気に底本としていた角川文庫版への<sup>シンパシイ</sup>信頼が失せ、同時に、「聊齋志異」電子化の<sup>やるき</sup>意欲も完膚無きまでに折れてしまったというのであった。……週に一度、妻のリハビリの迎えに下界に下りだけの<sup>しまながし</sup>謫仙人たる私は、この数年、新たに書籍を求めること自体をしなくなっており、新たに先行する天馬訳の諸本を入手して仕切り直すというような<sup>かたぎ おもい</sup>律義な意思も動かなかったのであった。……

そのうち、<sup>さきごろ</sup>先般、ふと、すっかり御厄介になっている国立国会図書館の近代デジタルライブラリーの中に、<sup>ぼつすいやく</sup>抄本乍ら、戦前の<sup>きんきらきん</sup>豪華絢爛の天馬訳があることを知り、漸くやる気が復活たという訳である。

かくして底本は、同ライブラリーの大正一五（一九二六）年第一書房刊に変えた。しかも<sup>あたりきしやりき</sup>当然、正字正仮名版であって、その点でもこれ、<sup>タイピング</sup>打込しても頗る心地<sup>むねがす</sup>好くである。

踊り字「く」「ぐ」は正字化した。但し、底本は総ルビであり、これはまた、まともにやるとなると、とんでもなく時間がかかるので、天馬訳の真骨頂の箇所、及び、難読或いは読みが振れると私が判断したもののみのパラルビとしたことはお許し願いたい。但し、原文と照応させてみて明らかに意味が通らず、誤植と断ずることが出来たものは注せずに訂した（例えば、原文が「兩月」であるのに「雨月<sup>ふたつき</sup>」とあるようなケース）。最後の注は本文とは一行空けて配した。原典ではポイント落ちで各注一行が二字下げ、二行目以降は一字下げであるが、本文と同じにした。出来上った形は頗る角川文庫版<sup>そつくり</sup>に酷似だが、遙かに正統<sup>まっとう</sup>な天馬訳の電子化であると私は秘かに自負しているのである。原文は従来通り、中文繁体字の「維基文庫」から引いている（柴田氏が底本としたものとは微妙に異なる箇所がある）。……しかしルビ付けが面倒なことには変わりがない。これも次の回の公開が何時になるかは知れぬ。……

手始めに、如何にも御洒落な色塗りで翻<sup>インスパイア</sup>案し、不遜にも中国人に読んでもらうことを末尾で望んでる太宰治の訳や、怪奇談<sup>ホラー・テラー</sup>玄人田中貢太郎訳など、電子テキストがごろごろしている「竹青」を、ここで敢えて持ってくることにした。この如何にも大陸的な乾性<sup>ドライ</sup>な、而して湿性<sup>ウェット</sup>なところはしっかり濡れてる天馬氏の自在<sup>てんまそらをかけるがとき</sup>奔放それと、是非とも比較して戴きたいためである。なお、本「竹青」では例外的に第一段落目の「呉王廟」の後に（ ）本文中にポイント落ちの二行割注が入るが、同ポイント（ ）で示した。【二〇一五年六月二十日 藪野直史】

## 竹 青

魚容ぎようは湖南ひとの人で（とのみで話した者は郡むらや邑むらを忘れて居た）家がたいそう貧しかったから、文官試験に落第して、歸つて來る途中で資斧ひようが斷絶つぎきたけれど行乞もらつてあるくのは、羞かしくて出來ず、甚く飢ひどて居るので歩く力うきはなし、暫く吳王廟ごわうべう（吳王廟といふのは三國時代の吳の虎臣と云はれた甘寧將軍を祀つたもので、楚江の宮池鎮の水邊にあるのださうだが、廟の傍への林には數百の鳥が棲んで居て、廟前を通過する客船を二三里も前から出迎へ、帆檣の上で群がり噪ぐ。すると船の客人達は水路の平安を守つて下さる吳王の神鴉だといふので、思ひ思ひに肉を空中に投げ上げる。それを一つも墮さずに接けて喰ふのがなかなかの奇觀ださうだ。吳王廟が江畔にあるといふことゝ、客船が廟の前を絶えず來往することが先づ頭にはいつて居ないと、興味が少ないから此註だけは本文に挿入する）の中で憩やすんで居た。因、神様を拜んで憤懣ふへい之詞を訴へ廊下でに出て臥つて居ると、一人の人が魚ぎよを引去れて吳王かみさまに見え、跪まみいて、

「黒い衣きものが墮ちて、卒そつが一人缺員にんけつゐんになりましたから此男このを補充まを致しませう」と曰しあげた。吳王かみさまが、お可ゆるしになる、即黒い衣きものを授かる、身に、つける、忽ち化して鳥からすとなる、振翼ほぶたきをして出て見ると、一群むれの鳥が居たので相將いっしよ俱になつて飛んで去つた。鳥どもは、多くの帆檣ほぼしらに分かれて集まり、舟の上りよかくの旅客が争つて肉を抛擲なげてくれるのを、空中に群りながら、接けて食ふのである。それで亦やは（一）尤效まねをして居る須臾うち（二）果腹はらがくちくなつたから、翔んで樹の杪きに棲り、大おほいに得意で居た。二三日すぎ躰ると吳王かみさまが偶つれあひの無いのを憐れに思つて雌あはを配してくれた。それは竹青ちくせいと呼ぶので、相たがひに愛し合つて、楽しく日を送つた。

魚は食物しょくもつを取るのに、輒ややもすると馴れて機ようじんをしないから、竹青しよふいきは恆勸諫めるのであつたが、卒とうとう聽きかなかつた。一日あるひ兵士が船で過つた。幸さいはひに竹青くはが銜いへて去つたから擒つかまらずにすんだのである。鳥の群は怒つて鼓翼ほぶたきをして波あふを擲つたので、波が湧き起こつて、舟は、盡みんな覆へつた。竹青は、餌とを攝つてきては、魚ぎよを哺はぐくんで居たが、魚ぎよの傷できず、甚ひどかつた

ので、終日で斃でしまった。忽、夢の如に眼が醒めて自分は廟の中に臥つて居るのであつた。

是より先き、居人は魚の死んでるのを見出したが誰の誰か分からない。撫でて見ると未だ氷つても居ないので、不時人を邏察之て置いた。それが今生きかへつたので、訊ねて事情を知り、質を斂めて送り歸した。

三年の後である。魚は、復故の場所を通つたので、呉玉廟に參詣し、食物を供へ、鳥を呼び集ひ集めて啗さしてやつた。乃て、

「竹青が如此中に居るならあとに止まつておいで」

といつて祝つたが、食べて已と、竝飛んで去つた。竹青は居なかつたのであろう。後ち領薦り歸りに復た呉玉廟に謁つて少牢を薦げた。已今て大なる食物を設へて鳥の友を饗応し、又同じやうに祝つたのであつた。是夜舟を湖村に繋いで一宿したが、秉燭方座つて居ると、飛鳥の如に、飄りと落ちたものがあつた。視之則二十許の美しい人である。輒然して、

「お別れまをして來無恙乎」

と曰た。魚が驚いて問ねると、

「君、竹青を不識耶」

といふ。魚は喜んで何所から來たかと話ねた。麗しい人は曰うた、

「妾は今漢江の神女になつてますから、故郷に歸つて來ることは、少なんです、けれど前ごろ、鳥の使が兩も君のお情けをさう道ました故來て一相聚るのです」

魚は益々欣び感じた。宛ど久しく別れて居た夫妻の如に、懽しき戀しきに勝へぬのである。そこで生は與偕に南へ行かうと將る、女は、與偕に西へ行かうと欲る、兩謀とも決まらずに寢初興ると女は已起きて居た。目を開けて見廻すと、高堂の中に大きな燭が熒煌とかがやいて、竟も舟ではない。驚いて起きて來て、

「此は、何所だ」

と、問ねる。女は笑つて、

「此は漢陽なん也。妾の家はとりもなおさず郎の家ではありませんか。南へ往かなければ

ならないこともなでせう」

と曰つた。天漸暁になると、婢や媼が集つて讌の用意が已設た。廣い牀の上に短い几を陳て、夫婦さし對ひで飲むのである。魚が、僕の所在を問ねると、舟上に居ますと答へた。舟人が久しくは待たないだらうと生が心配すると、女は言つた、

「不妨ん。妾が君のために報をしますヨ」

於是夜日談したり讌をしたりして楽しんで居た。そして歸るのを忘れて居た。

舟人は夢が醒める忽漢陽だから、非常に駭いた。僕は主人を訪ねてみたが、香として信兆がない。舟人は、他へ適かうとしたが纜が結ばつて解けないので遂う僕と共に、舟を守ることになつた。

兩月餘り過ぎた。生は忽歸りたいと思つて女に謂ふには、

「僕が此に居ると親戚との仲も斷絶てしまふ。且らず卿は僕と琴瑟の名ばかりで一度も家門を認ないのは奈何だ」

女は曰つた、

「妾が不能往のを、そんなに論らないで下さい。縦ひ往けるにしても君の家には婦が有るではありませんか。あたしを、將何以處妾也の、不如も、妾を此に置いて君の別院にした方が可でせう」

生が、道が遠くて時々至ることが出来ないからと恨がると、女は黒い衣を出して曰つた、

「君の舊の衣が尙在ります。如妾のことを念ひ出した時には、此を、衣れば至られますし、至しつたら君のために之を解してあげませう」

乃で、大に珍しい肴を設らへて生のために祖餞をした。既、酔つて寝てしまつた、醒めると身は舟の中にある。視之、洞庭の舊の泊り場所で、舟人も、僕も俱に在た。相視て大に駭き、往つて居た所を詰ねるので、生は、故と悵然げに驚りした風を見せた。枕の邊に一つの襖があるのを檢めると、女の贈れた新しい衣や襪や履などで、黒い衣も亦り、摺んで、其中に置いてあつた。又繡をした褙が腰の際に維繫であつて、それを探ると金貨

が一杯充ちて居た。於是南に向つて出發し、岸に達してから舟人に厚の酬をして去らしめた。

家に歸つて數箇月を経た。苦く漢水のことが憶はれる因潜かに黒い衣を出して著た。兩脇に翼が生えて翕然に空を凌いで飛んで行き、兩時ばかり経つと已漢水に達して居た。回翔ながら低く下つて見ると孤島の中に一簇の樓舎がある。で、飛び降りた。婢子が、已望見之て呼て曰つた、

「官人が、至になりました」

無何竹青が出て來て衆手に命け、生のために、黒い衣の結び目を緩めさせた。羽毛のきものが劃然と脱げる。手を握つて中へはいつてさう曰つた、

「恰好いところへ來になりました、妾は旦夕臨蓐さうなんです」

生は戲に問ねて曰つた、

「胎生かネ、卵生かネ」

「妾は今では神になつてゐるんです則、皮も骨も已更つて、囊は異ひますヨ」

數日を経てから果して胎生の子供を産んだ。胎衣が厚く裹んで居て巨きな卵の如であるのを破つて見ると男の兒であつた。生は喜んで漢産と名をつけた。三日の後ち漢水の神女たちが服飾や珍らしい物を贈りものとして賀ひに登堂たが、皆な佳で妙く、三十以上の女はなかつた。一同室に入つて榻にむかひ、拇指で兒の鼻を按で、名まえを増壽とつけた。去つてしまつてから生が、

「あれは、皆な誰エ」

と、問ねると女が曰つた、

「皆な、妾の輩です。末後の、藕白を著て居たのが所謂漢舉で佩を解いた仙女なんです」

數箇月して女が舟で送つて呉れた。船は帆や楫を用ゐずに飄然と自で行つた。陸に抵つくと巳人が馬を道左に繫いで俟つて居た。生は歸つた。由此は絶えず往來して居たが、數年を経ると、漢産は、益々秀美になつたので生は大そう可愛がつた。妻の和氏が不育のな

いのを苦しめて一度漢産を見たいと毎想つて居る事情を生が女に告たので女は装を治へ、父と一緒に兒を歸へしてやつた。それは三月の間といふ約束であつた。歸つて來ると和氏は己の産んだ子以上に可愛がり、十月餘りになつたけれども返すに忍びないといつて返さずに居た。すると一日暴かに病氣となつて殤した。和氏の悼痛は欲死である。生は、乃で女に告ふために漢水に詣つた。門を入ると、漢産は跣足のまゝで牀の上に臥で居る。喜んで女に問ねると女は曰つた、

「君が、久しく約束に負いていらつしやるので、妾は兒がなつかしくなりましたから招せたくです」

因、和氏が兒を可愛がつてるといふことを生が述すと、女は曰つた、

「妾が再育るのをお待ちなさい」一年餘りすると女は男と女の雙兒を生み、男を漢生女を玉佩と名づけた。生は遂漢産を携へて歸つたが、年恆に二三次は漢水に行くので不便であるといふところから漢陽に移家た。漢産は、十二の年に郡の庠にはいつた。女は人間には美しい質の女がいなると言つて漢産を招いて婦を娶らせ、そして始歸してよこした。婦の名は扈娘といつて亦り神女の産れである。後ち和氏が卒たので、漢生も妹も、皆な來て擗踊して悲んだ。葬式が畢でから漢産は家に留り、生は漢生玉佩を携へて去つたが、此れからは返らなかつた。

(一) 左傳の僖公二十四年に尤而效之とある。人の非行を尤めつゝ自分もそれに效ふといふことである。

(二) 莊子の逍遙遊に腹尚果然たりとある。腹がくちくて減つて居らぬといふこと。

(三) 少牢とは羊と豚を供へること。

(四) 列仙傳に、鄭交圃といふ人が漢皋で二人の仙女が大きな兩つの珠を佩て居るのを見てそれを下さいといつたら仙女は解いて鄭に與へた。鄭は少し歩んで振りかへて見たら仙女の姿は見えなかつた。そして珠も矢張りなくなつてしまつたといふことが出て居る。

(五) 禮の檀弓にて擗踊哀之至也とある。擗とは、心を拊つて哀しみ、踊とは足ずりして哀

むのである。

## 竹青

魚容，湖南人，忘其郡邑。家貧，下第歸，資斧斷絕。羞於行乞，餓甚，暫憩吳王廟中，拜禱神座。出臥廊下，忽一人引去，見王，跪曰：「黑衣隊尚缺一卒，可使補缺。」王曰：「可。」即授黑衣。既著身，化為鳥，振翼而出。見鳥友群集，相將俱去，分集帆檣。舟上客旅，爭以肉向上拋擲。群於空中接食之。因亦尤效，須臾果腹。翔棲樹杪，意亦甚得。踰二三日，吳王憐其無偶，配以雌，呼之「竹青」。雅相愛樂。魚每取食，輒馴無機，竹青恆勸諫之，卒不能聽。一日，有滿兵過，彈之中胸。幸竹青啣去之，得不被擒。群鳥怒，鼓翼搗波，波湧起，舟盡覆。竹青仍投餌哺魚。魚傷甚，終日而斃。忽如夢醒，則身臥廟中。先是，居人見魚死，不知誰何，撫之未冷，故不時令人邏察之。至是，訊知其由，斂貲送歸。後三年，復過故所，參謁吳王。設食，喚鳥下集群啗，祝曰：「竹青如在，當止。」食已，並飛去。後領薦歸，復謁吳王廟，薦以少牢。已，乃大設以饗鳥友，又祝之。是夜宿於湖村，秉燭方坐，忽几前如飛鳥飄落，視之，則二十許麗人，靦然曰：「別來無恙乎？」魚驚問之。曰：「君不識竹青耶？」魚喜，詰所來。曰：「妾今為漢江神女，返故鄉時常少。前鳥使兩道君情，故來一相聚也。」魚益欣感，宛如夫妻之久別，不勝權戀。生將偕與俱南，女欲邀與俱西，兩謀不決。寢初醒，則女已起。開目，見高堂中巨燭熒煌，竟非舟中。驚起，問：「此何所？」女笑曰：「此漢陽也。妾家即君家，何必南！」天漸曉，婢媪紛集，酒炙已進。就廣床上設矮几，夫婦對酌。魚問：「僕何在？」答：「在舟上。」生慮舟人不能久待。女言：「不妨，妾當助君報之。」於是日夜談讌，樂而忘歸。舟人夢醒，忽見漢陽，駭絕。僕訪主人，杳無音信。舟人欲他適，而纜結不解，遂共守之。積兩月餘，生忽憶歸，謂女曰：「僕在此，親戚斷絕。且卿與僕，名為琴瑟，而不一認家門，奈何？」女曰：「無論妾不能往；縱往，君家自有婦，將何以處妾乎？不如置妾於此，為君別院可耳。」生恨道遠，不能時至。女出黑衣，曰：「君向所



著舊衣尚在。如念妾時，衣此可至；至時，為君解之。」乃大設肴珍，為生祖餞。即醉而寢，醒，則身在舟中，視之，洞庭舊泊處也。舟人及僕俱在，相視大駭，詰其所往。生故悵然自驚，枕邊一襖，檢視，則女贈新衣襪履，黑衣亦摺置其中。又有繡褙維繫腰際，探之，則金貨充牣焉。於是南發，達岸，厚酬舟人而去。歸家數月，苦憶漢水，因潛出黑衣著之。兩脅生翼，翕然凌空，經兩時許，已達漢水。回翔下視，見孤嶼中有樓舍一簇，遂飛墮。有婢子已望見之，呼曰：「官人至矣！」無何，竹青出，命眾手為緩結，覺羽毛劃然盡脫。握手入舍曰：「郎來恰好，妾旦夕臨蓐矣。」生戲問曰：「胎生乎？卵生乎？」女曰：「妾今為神，則皮骨已硬，應與曩異。」越數日，果產，胎衣厚裹，如巨卵然，破之，男也。生喜，名之「漢產」。三日後，漢水神女皆登堂，以服食珍物相賀。並皆佳妙，無三十以上人。俱入室就榻，以拇指按兒鼻，名曰：「增壽」。既去，生問：「適來者皆誰何？」女曰：「此皆妾輩。其末後著藕白者，所謂『漢皋解珮』，即其人也。」居數月，女以舟送之，不用帆楫，飄然自行。抵陸，已有人繫馬道左，遂歸。由此往來不絕。積數年，漢產益秀美，生珍愛之。妻和氏，苦不育，每思一見漢產。生以情告女。女乃治任，送兒從父歸，約以三月。既歸，和愛之過於己出，過十餘月，不忍令返。一日，暴病而殤，和氏悼痛欲死。生乃詣漢告女。入門，則漢產赤足臥床上，喜以問女。女曰：「君久負約。妾思兒，故招之也。」生因述和氏愛兒之故。女曰：「待妾再育，令漢產歸。」又年餘，女雙生男女各一：男名「漢生」，女名「玉珮」。生遂攜漢產歸。然歲恆三四往，不以為便，因移家漢陽。漢產十二歲入郡庠。女以人間無美質，招去，為之娶婦，始遣歸。婦名「卮娘」，亦神女產也。後和氏卒，漢生及妹皆來擗踊。葬畢，漢生遂留；生攜玉珮去，自此不返。